

令和元年6月7日現在

機関番号：32607

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07075

研究課題名（和文）19世紀フランスの古楽復興過程にみるライシテ問題 ダンディの音楽活動を中心に

研究課題名（英文）Laicite in the Revival of Early Music in 19th Century France: Vincent d'Indy and his Musical Activities

研究代表者

安川 智子（YASUKAWA, Tomoko）

北里大学・一般教育部・講師

研究者番号：70535517

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀後半のフランスにおける「古楽復興」には、様々な動因があるが、そこには、19世紀フランスの独特な宗教事情がからんでいると考え、スコラ・カントルムの創立に関わった作曲家ヴァンサン・ダンディを中心にその背景を探った。その結果、古楽を聴くという行為とフランスの和声との関連や、バロック・オペラの復興とヴァグネリスム/ドビュッシスムという思想的潮流との関連が明らかになり、古楽復興活動がフランスの来るべき黄金期につながる重要な活動であったこと、そしてそれに対して、宗教/世俗の境を越えた音楽教育や音楽活動を行ったダンディの貢献度がきわめて大きなものであったことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、古楽を「聴く」という聴覚の問題が近代フランス音楽の新しい和声へと道を開いた可能性を、当時の音楽批評や理論書、時代背景の考察を通じて提示し、音楽雑誌に集う人脈を整理することで、新しい音楽的・思想的潮流がいかに生まれたかを考察した。

古楽復興という題材は、20世紀に古楽演奏が流行を極め、また現在その流行が（当たり前になったという意味で）下火になっていることから、多くの問題解決を必要とする現代的なテーマである。バロック・オペラの復興と、その重要な役割を担ったフランスの作曲家ダンディについての本研究は、これまで見落とされてきた古楽復興の背景を明らかにした点で、意義があったと考える。

研究成果の概要（英文）：There were many reasons for the “regeneration of early music” in France in the late 19th Century, but it appears that unique religious circumstances in France at the time played a role. This research sought to clarify the background of this regeneration, focusing on Vincent d'Indy, the French composer who was one of the founding members of the Schola Cantorum. The findings of this research reveal that early music restoration activities paved the way for a golden period in French music, especially due to the relationship between the act of listening to early music and modern French harmony and that between the restoration of baroque opera and the philosophical tidal current of Wagnerism and Debussyism. The research also reveals that the freedom from religious-secular boundaries in d'Indy's musical education and activities were extremely significant for the rise of this golden period.

研究分野：音楽学、美学、西洋音楽史、音楽理論史

キーワード：古楽復興 ヴァグネリスム ドビュッシスム 和声 ヴァンサン・ダンディ

1. 研究開始当初の背景

19世紀のフランスは、宗教からの分離へと進む国家と、主にドイツへの対抗意識による国民意識(ナショナリズム)が複雑に絡み合っている。こうした事情についての研究は、現在日本においても、宗教学、社会学、歴史学、文学が連携しつつ進捗している。しかし、宗教ともっとも近い性質をもつ音楽についての考察が、こうしたいわゆるライシテ研究において本格的になされたことはなかった。キリスト教と密接に関わりつつ成長してきた西洋音楽において、宗教と分離することは、必ずしも音楽家にとってよいことではない(たとえばフランスでは、ランクやサン＝サーンス、フォーレなどが就いた教会におけるオルガニストという職が極めて高い地位を保持していた)。一方で、作曲家、演奏家にとってエリート街道を意味するパリ音楽院が、国の音楽教育機関として、明確に世俗化への方向性を打ち出していた。この矛盾を音楽家たちはそれぞれ内に抱えながら、音楽活動を行っている。

このような、音楽におけるライシテ問題、すなわち世俗化するフランス社会において、音楽がいかなる役割を果たすのか、という問題を考えるにあたって、研究代表者はこれまで、音楽学という分野において、19世紀のフランス人作曲家たちの国民意識(ナショナリズム)の問題と、音楽理論的問題という二つの側面から研究を進めてきた。音楽理論的問題とは主に、「調性」に対する「旋法性」という音楽的特徴に関する研究である。これは音楽を垂直的に理解する調性と、水平的に理解する旋法性の違いであり、古い宗教音楽や、西洋以外の音楽において顕著な旋法性を、19世紀のフランス音楽が積極的に取り入れることで、純西洋的あるいはドイツ的な調性音楽と一線を画そうとしたということ、博士論文やPD期間における研究で主張してきた。それぞれの領域では、ここ20年で世界的にも研究の飛躍的な進展がみられるが、音楽家をめぐる社会的研究と音楽理論的研究を総合的に結びつけようという研究はまだみられなかった。

こうした背景から、ライシテ研究における音楽の重要性を主張するためには、この両側面を統合する視点が必要であると考え、それを可能にするのが、古楽復興 フランスにおける「過去」を音楽として再構築、再現しようという運動 というテーマと、それに深く関与した作曲家ヴァンサン・ダンディ(1851～1931)の教育思想および体系化された音楽理論についての研究であると思いついた。ダンディは過去において、極右的政治活動への関与などから研究対象として警戒され、また国の音楽組織であるパリ音楽院に対抗する宗教的音楽学校スコラ・カントルムを創立したという先入観から、ネガティブな視点で捉えられることが多かった。しかし「古楽復興」というテーマで彼の活動を見返すならば、ダンディは多大なる貢献者であり、音楽家としてのダンディの活動は、必ずしもパリ音楽院に対立するものではないということが分かってきた。さらに言えば、時代が大きく動く中、ダンディのとった貴族的立場と行動は、20世紀初頭において、ラモーやその他バロック時代のオペラの復興活動を通じて、結果的にフランスの音楽文化を救うことになる。なぜなら、宗教音楽の領域で保たれていた過去の遺産を保存し再現する手法が、オペラのような世俗の音楽においても、大いに役立ったからである。本研究では、ダンディの教育思想、音楽作品、音楽理論書、そして実践活動を多角的に検証し、ダンディが世俗化してゆく社会において、どのようにして音楽の聖性を維持したのかを明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 19世紀フランスにおける古楽復興の過程を跡付けるとともに、とりわけ1894年に私立の宗教音楽学校スコラ・カントルムを設立したヴァンサン・ダンディに着目し、彼の教育思想と音楽理論、および音楽的活動(ラモーのオペラの楽譜校訂や歴史的再演等)と、それらが古楽復興に果たした役割を総合的に検証する。

(2) 世俗の音楽教育の象徴であるパリ音楽院に対抗する存在であると考えられてきたスコラ・カントルムであるが、ダンディの著述、作品および人間関係を丹念に辿ることで、必ずしも二項対立ではない構図が浮かび上がる。19世紀フランスの音楽家たちが、世俗化していくフランス社会において、表面的には対立を演出しつつもいかに連携していたか、古楽復興という活動を通じて協力し合うことで、いかにフランス音楽のアイデンティティ確立と宗教性の保持に寄与したかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) ヴァンサン・ダンディの著述や理論書、および当時の音楽雑誌や音楽批評を解読することによって、作曲家の表面的な言動や政治活動では分からない、音楽面における協力関係を明らかにする。具体的には、スコラ・カントルムにおけるダンディの教育活動(過去の音楽の修復と演奏活動、および『作曲法講義』に集大成される音楽思想と作曲理論)、デュラン社の『(旧)ラモー全集』の編集作業においてダンディが果たした役割を調査する。

(2) 当該研究期間の間に、2冊の共編著書の執筆・編集活動を行ったため、共同編集者たちと定期的に編集会議を行い、学術的な意見交換を行った。1冊は、音楽理論史の分野において、それぞれ異なる時代と国を対象として研究を行う研究者たちとの共著（『ハーモニー探究の歴史』）であり、もう1冊は、音楽と、それ以外の人文学分野（文学、美術、建築、比較文化）の方たちとの、19世紀のグランド・オペラについての共著（『悪魔のロベール とパリ・オペラ座』）である。こうした他分野・他領域の方たちとの積極的な意見交換によって、多角的・学際的な視点を獲得することができたため、それを自身の研究にも反映させるよう心がけた。

(3) 年度ごとの研究実施方法

2017年度

前年度までに集中して取り組んでいた、19世紀フランスにおけるラモーの復興に関する研究調査とその資料を整理し、キーファーの論文（Alexandra Leigh Kieffer, “The Debussyist Ear: Listening, Representation, and French Musical Modernism,” *19th-Century Music*, Vol. 39, No. 1, Summer 2015, pp. 56-79）に大いにインスピレーションを受けて得られた新たな視点を加えて、論文にまとめた（雑誌論文）。

また2018年2月にパリの国立図書館（BnF）へ資料調査に赴き、パリ音楽院の組織に関する資料閲覧と、19世紀の音楽雑誌についての網羅的な調査を行った。これらの調査のなかから、1905年に創刊された音楽雑誌『メルキュール・ミュージカル』の重要性が浮かび上がってきたため、この創刊号を読み解き、2018年3月に行われた美学会東部会例会において、研究発表を行った（学会発表）。

2018年度

9月にバーミンガムで行われた国際会議に参加し、前年度の成果をもとに研究発表を行った（学会発表）。この会議は、1870年以降のフランスにおける新古典主義をテーマとしたもので、音楽的過去の再構成、という、まさに研究代表者自身の関心と研究目的にぴたりと合致したものであった。実際、19世紀における楽譜（全集）の編纂や出版事業の重要性、聖歌や教会音楽の19世紀における復興事業の意味、チェンバロなどの楽器の復元事業と、それらを用いたバロック・オペラの復興、当時の音楽雑誌を用いた研究方法など、現在の筆者の研究活動の基盤となる視点や知識を得るきっかけとなった著作物の著者たちが、一堂に会していた。彼らと実際にお会いすることで、筆者自身の研究上の立ち位置を再確認し、これから進むべき道についても考えを新たにすることができた。

11月には日本音楽学会全国大会に聴衆として参加し、発表はしなかったものの、多くのインスピレーションを得て、意見交換を行い、新たな共同研究の企画へとつながった。また同じく11月に日本ワーグナー協会にて依頼による講演を行い、その準備の過程で、再び研究上のインスピレーションを得た。こうした機会や過程のすべてを、まだ成果として活字にできているわけではないが、その一部は、2冊の共著（図書）の担当章と、紀要論文（雑誌論文）という形で公表することができた。

4. 研究成果

「研究活動スタート支援」という種目名のとおり、2年間の支援をいただいたことで、北里大学という新たな研究活動の拠点を得て、今後どのような立ち位置で、どのようなテーマを主軸に据えて継続的・長期的に研究活動を進めていくか、という見通しを立て、隣接する多領域の共同研究者たちと、研究上の協力関係を結ぶことができたことが、一番の研究成果であるといえる。以下具体的に述べていく。

(1) 19世紀フランスにおける古楽復興と新しい和声の関係

19世紀フランスにおけるラモーの再評価と、具体的な「古楽復興」の動きを整理するなかで、これまで図式的に対立関係のようにとらえられていたサン＝サーンスとダンディや、ダンディとドビュッシーなどが、緻密に協力関係を築いていたことがわかってきた。さらに、前出のキーファーの論文から、近年の聴覚研究の飛躍的な発展へとたどり着き、この「聴き方の変化」という視点が、古楽復興活動とドビュッシーによる新しい和声の誕生を接続させるものであることが見えてきた。

実際に19世紀に行われたラモー作品の演奏会批評を辿り、年代ごとに比較してみると、批評家たちの「聴き方」や過去の作品への対峙の仕方が、明らかに変わっていくことが見てとれた。そのきっかけは複数あるが、ひとつには、キーファーが指摘したように、1860年代にヘルムホルツによって『音感覚論』や『生理光学論』が発表され、フランスで流行したこと、哲学分野におけ

るヘルムホルツの応用から、さらに文学的な音楽批評家たちによって音楽批評へと応用されていたことが挙げられる。もうひとつは、実際のコンサート・ホールにおける聴取体験から得られた「気づき」である。19世紀の習慣で、ベルリオーズなどの大規模な管弦楽作品と並べて演奏されていたラモーは、退屈に感じられたのに対して、ヴァンサン・ダンディやシャルル・ボルドが中心となってスコラ・カントルムで行われたラモーやバロック音楽の演奏会は、非常に心地よい聴取体験を聴衆に与えたことが、音楽批評から分かってきた。そしてそうした聴衆の一人が、ドビュッシーであった。

紀要論文(雑誌論文)では、スコラ・カントルムでの演奏会が「古楽」を聴くうえで理想的であった理由を分析し、会場の適度な広さや、貴族的な空間を懐かしみ、対象となる音楽様式を理解して、訓練された耳で聴くことのできる理想的な聴衆、などを指摘した。さらに、和声理論の歴史をたどった共著(図書)の第5章において、具体的な「聴き方の変化」がいかにドビュッシーの新しい和声につながったかを、和声理論や音楽批評家による説明の比較によって示した。

(2) 音楽批評家の協力関係と思想的潮流の関係について(ヴァグネリズムとドビュッシズムの解明の必要性)

(1)の研究過程で、ドビュッシーの音楽や新しい和声を支持する音楽批評を展開した批評家のジャン・マルノルドの重要性が明らかとなり、その周辺を調査したところ、1905年に創刊された『メルキユール・ミュージカル』という音楽雑誌が、ドビュッシズムの形成において、きわめて重要な証拠となりうるということが分かってきた。文芸誌から派生して生まれた音楽雑誌であるうえ、執筆者の多くは、音楽家ではなくむしろ文学者(あるいは音楽批評家)と理解される人々であったが、その随所に和声についての真剣な議論が見られた。そこで第一段階として、この雑誌の創刊号が、「フランスの新しい和声(=フランス的和声)」の(言説的)誕生の場であった、との仮説をたてて読み解き、2つの学会発表(学会発表)は主にその視点から行った。

しかし会場で得られた反応やさらなる調査によって、「フランス的和声」という意識は、この段階ではなかったのではないかと、という結論にいたった。その間に、日本ワーグナー協会での講演依頼があり、自身の研究と関連づけて、フランスの音楽家たちによるワーグナー受容について調査したところ、フランスにおけるヴァグネリズムからドビュッシズムへの潮流の変化に、ヴァンサン・ダンディが重要な役割を果たしていることが見えてきた。

そこで、この視点により、改めて『メルキユール・ミュージカル』創刊号とそこに至る関係者たちの人間関係を整理したところ、19世紀において、フランスの音楽批評雑誌が次々と創刊・廃刊・統合され、それに伴って、音楽批評家や音楽学者、さらに作曲家たちが雑誌ごとに集まっていること、そのコミュニティや人的交流のなかから、今日表面的に理解されているヴァグネリズムやドビュッシズムといった音楽的・美学的潮流が生み出されていく様相が見えてきた。この結果は論文にまとめ(雑誌論文)、創刊号に関係する人物たちをダンディと結び付けて、(1)で得られた古楽復興活動にかんする情報ともからめて整理した。そして「フランスのワーグナー」となるはずであったダンディが、批評家たちの動きによって、「フランスの作曲家」としてのドビュッシーに取って代わられたこと、「フランスの作曲家ドビュッシー」が生み出される過程には、ダンディと彼のオペラ作品、そして彼の様々な音楽活動(古楽復興活動)の存在があったことを結論として提示した。

(3) 今後の展望

ヴァグネリズムとドビュッシズムについては、まだ未解明の部分が多いことが分かった。実際、19世紀後半から20世紀にかけてのフランス音楽界を象徴する重要なワードであるにもかかわらず、これらが音楽思想的・美学的な潮流であるのか、あるいは具体的な音楽作品や言説を指すのか、あるいは目に見える行動を指すのかも、今のところ見解は一致していない(ヴァグネリズムは一般的な辞典に定義が載っているが、ドビュッシズムと対照させて再定義する必要がある)。この点を整理することが急務であるため、2019年7月に京都の同志社女子大学で行われるシンポジウム「音楽史の中のベルギー」で、「ヴァグネリズムとドビュッシズム」と題した研究報告を行う予定である。その際に、「聴覚」の問題はやはり重要な視点であるが、フランスの音楽家たちにとっての「ヴァグネリズム」が、バイロイト劇場という空間におけるヴァグナーのオペラの聴取体験に直接由来するのではないかとということ、そしてそこに、一種の「宗教的体験」があったのではないかと、ということ、資料から裏付けていきたいと考えている。

共著『ハーモニー探究の歴史』では、西洋の和声理論が、今日の日本における和声理論にどのようにつながっているのか、という視点を意識した。その結果、研究対象である19世紀から20世紀のフランスの和声理論と日本の和声理論とのつながりが見えてきた。そんな折、2018年11

月に参加した日本音楽学会全国大会において、筆者と研究上の関心を大いに共有する香港の研究者の発表に出会うことができた。対話を重ねるなかで、ヴァンサン・ダンディやシャルル・ケクランら、フランスの音楽理論が日本の和声理論に大きな影響を与えていることが明らかであるにもかかわらず、日本においてはドイツ系の音楽史や音楽理論研究がこれまで主流であったことから、その視点が見落とされていることが分かってきた。さらにいえば、そうした日本の研究上の偏りが、ドイツの日本音楽研究者らによって、再生産されつつある現状が見えてきた。これらを是正する必要性を感じたため、2019年10月に蘇州で行われる、国際音楽学会東アジア支部大会において、フランスの音楽理論の系譜と、日本の作曲家箕作秋吉の音楽理論との関係について、発表する予定である（採択済み）。

当初の研究目的であったヴァンサン・ダンディの古楽復興活動における役割の総括と、ライシテ研究における音楽の重要性（およびフランス音楽のアイデンティティ確立における宗教性の保持）についての総括は、まだ今後の課題として残されている。これらの大きな研究目的を見失うことなく、現在取り組んでいる個別の研究課題をひとつひとつ解決していきたい。

なお、海外での研究発表や、海外の研究者との共同研究により、これまでのフランス音楽を対象とする研究を、さらに日本人としての筆者自身の立場からとらえ直す必要性を感じている。また同種の研究テーマを扱う海外の研究者たちと会うことができたが、和声と聴取の問題と、古楽復興運動を関連させる研究はなかった。そこで得られた反応からも、純粋な音楽理論と社会的背景の関連を問う筆者の一貫した方法論は、インパクトがあるという感触を得たため、今後も継続していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

安川智子、『メルキユール・ミュージカル』創刊号(1905)をめぐる音楽と批評の人脈図
ヴァグネル主義とドビュッシスムの考察に向けて、北里大学一般教育紀要、査読有、24号、
2019、35-47

安川智子、古楽を聴く耳の形成　ドビュッシューの時代に聴かれたラモーの音楽、北里大
学一般教育紀要、査読有、23号、2018、1-20
DOI: https://doi.org/10.20700/kitasatoclas.23.0_1

〔学会発表〕(計3件)

安川智子、世紀転換期フランスにおけるワーグナーの「音楽的」受容、日本ワーグナー協
会(招待講演) 2018年11月24日

YASUKAWA, Tomoko, "Styles of Listening to Early Music and the Creation of French
Harmony: Rameau's Music in the Debussy Era", International Conference "Editing,
Performing and Re-Composing the Musical Past: French Neoclassicism (1870-),
Birmingham, 7 September 2018

安川智子、フランス的和声誕生の一断面　『メルキユール・ミュージカル』1905年創刊号
を読み解く、美学会東部会例会、2018年3月3日

〔図書〕(計2件)

澤田肇、安川智子他(編著)、上智大学出版、悪魔のロベールとパリ・オペラ座　19
世紀グランド・オペラ研究、2019、376

うち第1部第1章(論文翻訳・共訳)マーク・エヴェリスト「フランス・オペラの創造と発
展　その社会構造と芸術的コンテクスト」22-49

第1部第2章(単著論文)「グランド・オペラからフランス・オペラへ　音楽批評から読
み解くマイヤベーアとグランド・オペラの歴史化」50-75

第3部第4章(オペラ座初演作品解説付きリスト・共著)299-336を担当。

西田紘子、安川智子(編著)音楽之友社、ハーモニー探究の歴史　思想としての和声理
論、2019、192

6. 研究組織

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。